溝口常俊　編著
『名古屋の江戸を歩く』
風媒社　2021年3月　157頁　1,600円＋税

名古屋大学名誉教授・歴史地理学会前会長溝口常俊は，専門の著書に加え，地元名古屋市への地域貢献の一環として『古地図で楽しむなごや今昔』，『明治・大正・昭和　名古屋地図さんぽ』，『古地図で楽しむ尾張』を公刊してきた。本書は，これらに続く書で，手軽に持ち歩き，名古屋のまち歩き，再発見に最適である。

第1章は近世前期文学の研究者塩村耕による「江戸の風景を求めて」，第2章は『名古屋地名ものがたり』の著者杉野尚夫による「江戸時代の地名さんぽ」，第3章は西村健太郎・千枝大志・川口淳・日比野洋文による「古地図に江戸を読む」，第4章は溝口常俊による「江戸時代の災害地に立つ」で構成されている。

第1章は鳥瞰図や名所図会，日記などをもとに風景のみならず，祭りや食まで話は広がる。なかでも熱田神宮の御的射の神事の後に大人が石を投げ合う「印地打ち」の記載など，興味深い内容が盛り込まれている。

第2章は江戸後期から明治初期の町名の変化，また第二次世界大戦後における戦災復興で広げられた碁盤割街路の変化，さらには熱田の町名の由来について石塔などの写真を交えて解説されている。

第3章は幕末の城下絵図，明治中期の地籍図，伊勢御師の壇家廻帖に記載された住居表示から追体験を試み，金山地区と堀川から河川水運の痕跡を辿り，さらに真宗大谷派名古屋別院，蓬ヶ島新四国八十八ヶ所などの寺々を廻る。最後に古地図をスマートフォンで撮影しておき，まち歩きに活用する撮影方法が記載されるなど，至れり尽くせりである。

第4章は地震，雷，火事，風水害の順に，『鸚鵡籠中記』の記載を中心に『青窓紀聞』や古地図から現状をたどり，今後の災害への備えを喚起する。

本書の特徴の一つは，トピックとコラムが設けられている点である。櫻井芳昭「紀行に見る江戸時代の名古屋―今に伝わる江戸の諸相」，富永和良「二代藩主光友は普請マニアか？―お殿様がつくった建築群」，小松史生子「竹腰家の首塚―尾張藩の幕末」，溝口常俊「京町筋の五条橋の橋の上―名古屋城下町誕生のミステリー」，中山剛マックス「名古屋城下にあった寺町―東寺町周辺」，山田和正「江戸の老舗を訪ねて―武家屋敷と町人街の境界を歩く」と，いずれも興味深い。

口絵には名古屋市博物館所蔵「名護屋図」が掲載されており，溝口常俊による解説が付されている。本図は名古屋城下から熱田神宮までの範囲が描かれており，道を黄色で示し，町人地は藍色で塗られ，方形の区間の中央には会所，拝領屋敷には武士名の記載があり，城郭内や寺社が絵画的な図像で描かれている。拡大図もあり，簡略で用を得た解説で全体像が良く理解できる。ただし，解説を確認するうえで，本図が作成された理由，図版がもう少し鮮明であればと思う読者も少なくないであろう。ともあれ，歴史地理学のみならず，近世史，仏教史，文学，都市計画など，学際的にコンパクトにまとめられており，自らの地元にも一冊あればと願う良書である。

（小野寺淳）